

W. B. Yeats とナショナリズム

日 下 隆 平

はじめに

本文は William Butler Yeats (1865—1939) の政治意識の変遷をさぐることを目的とするものである。その中でも特に、英国系アイルランド人で宗教はプロテスタント (“Anglo-Irish Protestant”) の Yeats がどのような立場で〈英国・アイルランド条約〉を受け入れ、アイルランド自由国 (“Irish Free State”) の中に何を求めたかについて焦点をあててゆくものである。しかし、“Irish Free State” 成立前後をみてゆく上で、それ以前の歴史に対する詩人の態度をさぐることは不可欠なことである。そこで、Ⅰ，Ⅱでは、主として過去の民族運動に対する Yeats の態度を扱い、Ⅲ，Ⅳでは、Yeats 自身のナショナリズムを検討してゆきたい。

Ⅰ

アイルランドでは、ナショナリズムという言葉はユニオニズムの対応語句として用いられる。つまり、前者は、英国からの独立を、後者は英国の中に留ることを望む政治的理念を示している。ナショナリストにはカトリック教徒が多く、ユニオニストにはプロテスタント教徒が多かった。

歴史を概観してみると、アイルランドと英国の関係は16世紀のチューダー王朝の征服があった時に始まる。17世紀半ばのクロムウエル植民 (“Cromwellian Settlement”), 1801年には、併合法 (“Act of Union”) が実現し、完全な英国支配となってゆく。

一方、宗教面では刑罰法 (Penal Law) がカトリック教徒に課され、「カトリック教徒を議会から締め出し、政府の官職には就任させない。」¹⁾など、18世紀前半はカトリック教徒にとって大変不遇な時代であった。この時、プロテスタントのカトリックに対する優位が確立してゆく。プロテスタントの多くは、古くは英国から派遣された行政官の子孫であったり、チューダー朝時代からの入植者の子孫が大勢を占めた。²⁾また、アルスター (Ulster) では、スコットランドとの結びつきが深く、英国国教会系 (Anglican) の他に長老派 (Presbyterian) がいる。土地所有割合で、カトリック教徒の所有地が大幅に減少し、プロテスタントの上層階級が生まれたのは、刑罰法の前Cromwellの遠征の時であった。³⁾

1801年、イギリスにアイルランドが併合されると、1829年、カトリック解放令が公布された。“Home Rule, Rome Rule” (独立はカトリック支配) と、全アイルランドのカトリック化は、プロテスタントに恐れられ、反対されながらも併合法の重要な原則として適用される。続いて、1869年には、“The Irish Church Act” により、アイルランドの “Protestant Episcopal Church” は、その財源を失い、信者に依存する存在となってしまった。つまり、アイルランドの “Anglican Church” は、非国教化されたのである。

概括して言えば、刑罰法以降の少数派のプロテスタントによる、多数派であるカトリックに対する支配の歴史であったことは異論のないところであろう。⁴⁾

William Butler Yeats は、1865年に、生を授かり、一ヶ月後、“Donnybrook Church” で洗礼を受けている。家系からみると、父側は、Jervis Yeats という商人を祖にもっている。彼は、ヨークシャー (Yorkshire) からの移民であると推察される。⁵⁾ その子 Benjamin Yeats は Mary Butler と結婚する。Butler 家は中世最も盛えた “Anglo-Irish” の領主 Butler 家の “Earl of Ormonde” につながるものであり、Butler 家を通じてアイルランド中世に、Yeats は関心をもった。Yeats の曾祖父はプロテスタントの教区牧師 (‘Parson Yeats’) であり、そ

の長男、つまり Yeats の祖父 William Butler も教区牧師 ('rector') となっている。プロテスタントとカトリックを支配者と被支配者と大雑把に区分することが許されるならば、一貫して Yeats の家系は、プロテスタントの支配者階級のそれであった。

Yeats は『自叙伝』 (*Autobiographies*) の中で、カトリック教徒と英国について、次のように回想している。

Everyone I knew well in Sligo despised Nationalists and Catholics, but all disliked England with a prejudice that had come down perhaps from the days of the Irish Parliament.⁶⁾

子供の頃に Yeats は、ナショナリストやカトリック教徒を軽蔑するプロテスタントの環境の中で育ったのであるが、その反面、プロテスタントに対して、「アイルランドのプロテスタントは出世のことばかり考えている。」と述べている。

I have noticed that Irish Catholics among whom had been born so many political martyrs had not the good taste, the household courtesy and decency of the Protestant Ireland I had known, yet Protestant Ireland seemed to think of nothing but getting on in the world.⁷⁾

Yeats の目に映ったアイルランドのカトリックは、プロテスタントのもつ家庭の礼儀や品の良さをもたないようにみえたと言っている。Yeats の一貫した問題の一つは “Anglo-Irish Protestant” のアイルランドと “Catholicism” をどのように結びつけるかということであった。それは文学においても政治においてもあらわれている。これらをみるために、次にアイルランドの民族運動の英雄に対する Yeats の態度をみてみよう。

II

アイルランドの民族運動は、1791年 “United Irishmen” がウルフ・トーン (Wolfe Tone) によって結成された時に始まる。Hugh Shearman によれば、初めはフランス革命の熱が伝わり法の前に万人の自由と平等をもたらすことを目的としてプロテスタントの法律家である Wolfe Tone によって結成されたが、しだいにアイルランド副総督 Lord Fitzwilliam 事件を契機に多くのカトリックが “United Irishmen” に加入し、英国との関係からアイルランドを完全に分離させようとする秘密結社となっていた。¹⁾ Tone の時代から現代アイルランドまで、“nationalist, isolationalist, republican” というアイルランド政治理念の伝統が続くのである。“republican” はアイルランドが過去に政治形態をもたないため、英国の政治形態のアンチテーゼとして、つまり “monarchy” に対する “republican” を考えた Shearman は指摘している。また “United Irishmen” は、アルスターのプロテスタントである “Presbyterian” と同盟を結んだこと、また、失敗に終わったがフランスと同盟を結んで英国政府に打撃を与えた点でも注目される。

Sean Cronin によれば、“United Irishmen” の遺産は、政治は宗教と分離されねばならぬものという理念であった。宣言の一節を引用してみると次のようである。

The weight of English influence in the goverment of this country is so great, as to require a cordial union *among all the people of Ireland*, to maintain that balance which is essential to the preservation of our liberties and extention of our commerce.²⁾

ここに見られるように、“United Irishmen” の宣言は、自由を守るために「心からの団結」として民族国家の理念をつくり出している。“nation-state” (民族国家)としての理念は “Young Ireland”, “Fenian”, “Sinn Fein” へと受け

継がれてゆくのである。実際面では武力による、英国からのアイルランドの分離 (Separatist) であった。³⁾ このような “United Irishmen” の反乱は英国にとってアイルランドが重要な課題であることを認識させることになり、1801年併合法 (Act of Union) が実現する。その後、英国法 (English rule) の適用に抗議して、1803年 Robert Emmet は、ダブリン城 (Dublin Castle) 襲撃を企てるが失敗する。

Yeats は Wolfe Tone について “September 1913”, “Sixteen Dead Men”, “Parnell’s Funeral” で Edward Fitzgerald とともに言及している。“September 1913” では、三人の “United Irishmen” の英雄的な死を理想化している。

For this that all blood was shed,
For this Edward Fitzgerald died, And
Robert Emmet and Wolfe Tone,
All that delirium of the brave?⁴⁾

他方では、Yeats 自ら “Anglo-Irish Protestant” の伝統を誇りにしている。

Protestant Ireland had immense Prestige, Burke, Swift, Grattan,
Emmet, Fitzgerald, Parnell, almost every name sung in modern song,
had been Protestant;.....⁵⁾

Yeats は彼が “timely sacrifice” とのべた、併合されてすぐおきた Emmet の反乱について次のように述べている。

Emmet had hoped to give Ireland the gift of victorious life, an accomplished purpose. He failed in that, but he gave her what was almost as good—his heroic death.⁶⁾

Emmet は「アイルランドに理想を残した」人物としてみなされている。

続いて Daniel O'Connell (弁護士)⁷⁾ に対する Yeats の見方をみてみよう。

O'Connell は Co. Clare よりカトリックの議員として最初に選ばれた。O'Connell の最大の功労は、“Act of Union” の原則の一つであったカトリック解放 (“Emancipation of Catholic”) がプロテスタントの反対にあってなかなか実現しなかったのを、1829 年実現させたことにある。ただしこの解放は、カトリック中産階級 (“middle-class Catholic”) が議会や公職に席を得ただけの結果となり、大部分のカトリックの立場は向上しなかったという指摘もある。⁸⁾

O'Connell が Wolfe Tone と異なっていたのは、アイルランドのカトリックから <反乱> という烙印をとり除き、プロテスタントと同様に英国王に忠誠を守り、その上でアイルランド議会の復活を目的としたことであった。又、武力による戦いを好まなかった。⁹⁾

Yeats は O'Connell について次のように述べている。

I sometimes think O'Connell was the contrary principle to Emmet. He taught the people to lay aside the pike and the musket, the song and the story, and to do their work wheedling and now by bullying. He won certain necessity laws for Ireland. He gave her a few laws, but he did not give her patriots. He was the successful politician, but it was the unsuccessful Emmet who has given her patriots. O'Connell was a great man, but there is too much of his spirit in the practical politics of Ireland.¹⁰⁾

Yeats は、O'Connell をアイルランド人に「槍と銃」を放棄させ、「アイルランドに必要な法律を与えたが愛国者を生みださなかった。」人物としてみている。Yeats の O'Connell に対する見方は Emmet に対する理想化に比して、好意的であるとは言えない。O'Connell がリピール運動のクレンターフでの集会

を英国政府の禁止に従って中止したことなども Yeats の見解に影響を与えている。O'Connell が、＜併合法反対＞(“Repeal agitation”) を唱えていたころ、少人数の記者が *The Nation* と呼ばれる週刊誌を 1842 年に発行した。その人々は “Young Ireland” (青年アイルランド党) として知られるが、メンバーは、Thomas Davis, Charles Gavan Duffy, John Dillon, John Mitchel 等であった。Duffy と Dillon はカトリックであり、他はプロテスタントである。彼等は “United Irishmen” 以来の “nonsectarianism and the secular state” 「民族の合一と政教分離の国家」という伝統と、ヨーロッパより浪漫的な国家主義を受け継いだ。¹¹⁾ また、今までに国家というものがアイルランドには存在しなかったと考えた。¹²⁾ 新たに英国の教育をうけた土地所有者 William Smith O'Brien が加わり、“Irish Confederation” が結成される。“Irish Confederation” は、反乱を試みるが、飢饉に荒れた国内でその努力は実らなかった。¹³⁾

¹⁴⁾ Thomas Davis に代表される “Young Irelanders” のめざしたものは、アイルランドに住む民族の合一と、プロテスタントとカトリックの合一であった。実力行使については、実際面での単なる戦術と考えた。だが John Mitchel のように実力行使の伝統を Wolfe Tone 以来続けた人もいる。

Yeats は若き頃と老齢になってからでは Davis に対する見解が異なっている。若き日、「私はデイビスにたとえられることがある。」と述べており、また、次のような一節も見られる。

Nor may I less be counted one with Davis, Mangan, Ferguson,¹⁵⁾

ここでは、Yeats が若き日 Davis の伝統に自らがいることを認識していたと考えられる。しかし、後年になると、“Young Irelanders” に対する評価は低くなり、自分の詩にアイルランドをとり入れるために「意識的な愛国主義」(“Conscious patriotism”) を用いたのは Davis の影響であると述べたあとに、“Young Irelanders” の影響を受けなければもっと深いアイルランド像を描け

ただろうと語っている。¹⁶⁾

Davis was possessed on the other hand with ideas of Ireland, with conscious patriotism. His Ireland was artificial, an idea built up in a couple of generations by a few commonplace men. This artificial idea has done me as much harm as the other has helped me.¹⁷⁾

Davis に関する二つの引用文を比較してみるかぎり、Yeats の Davis への見方が変化していったことは明らかであろう。

また John Mitchel の中に、不可能なものに立ち向かう政治上の殉教者としての姿をみている。

You that Mitchel's prayer have heard,
'Send war in our time, O Lord!'
Know that when all words are said
And a man is fighting mad,
Something drops from eyes long blind,¹⁸⁾

John Mitchel は 1848 年 “Irish Confederation” を仲間と去り、週刊誌 *United Irishman* (「革命を公言した雑誌」) を発行する。

III

アイルランドに於いて息の長い独立運動は、“Fenian movement” であろう。それはまた Yeats と大きな関わり合いをもってくる。1858 年、まずアメリカニューヨークで “Fenian Society” が結成され、アイルランドにも広がっていった。創設したのは、“Young Irelanders” のメンバーの James Stephen であった。“Fenianism” は、Irish Republican Brotherhood (IRB) とも言われる。そ

の目的は、完全に独立したアイルランド共和国を設立することであった。アメリカでは南北戦争を体験した“Irish American”に歓迎されていった。¹⁾“Fenian”は“United Irishmen”の伝統を復活強化させた。つまり、彼らの大部分は、カトリックであったが教会と政治の分離の立場をとったこと、又、実力による手段で共和国はできるという伝統であった。この“Fenianism”は次第に下火となり、秘密結社という形で存続するが、イースターの蜂起 (Easter Rising, 1916 年) の時、主役としての役割を演じる。

Yeats が“Fenianism”と関わりをもったのは John O’Leary を通してであった。Yeats 自身の説明によれば、O’Leary は、「二十年の刑を宣告されたが、十五年間はアイルランドに帰らないという条件で五年後釈放された。」²⁾

Yeats は、O’Leary から Thomas Davis などの詩や随筆を借りて読んだ。³⁾これらの作品に対する Yeats の評価は別にして、彼は O’Leary から多大な影響を受けたことは *Autobiographies* に記されているとおりである。二人は年令を越えて長い交友を続けた。後に“Young Irelanders”の一員でオーストラリアに亡命していた Gavan Duffy が帰国して、“Irish Literary Society”の名目上の代表となるが、Yeats はこれに反対した時、O’Leary は Yeats を支持している。“September 1913”で Yeats は最後のリフレインに O’Leary を出している。

Romantic Ireland’s dead and gone,
It’s with O’Leary in the grave.⁴⁾

この“dead and gone”は O’Leary が好んで用いた言葉であることを Malcolm Brown は指摘している。それはマクマナス (MacManus) 事件に際して O’Leary が書いたものと“September 1913”との類似である。MacManus はカリフォルニアで死んだ“Fenian”の一人だった。その遺体の引き取りに関して争いがあり、O’Leary は MacManus について次のように書いている。

……M'Manus had lived and died a rebel. With them all that was a thing of the past. 1848 was dead and gone, a mere thing of memory, and to any of them scarcely among the pleasures of memory.⁵⁾

ここに用いられている“dead and gone”は、“September 1913”と重ね合わさっていることを指摘している。

他方では Yeats は伝統の仲介者としての O'Leary を見ている。それを示すものとして次の文があげられよう。

They (O'Leary and Taylor) were the last to speak understanding of life and Nationality, built up by the generation of Grattan, which read Homer and Virgil, and by the generation of Davis, which had been pierced through by the idealism of Mazzini, and of the European revolutionists of the mid-century.⁶⁾

Yeats にとって O'Leary は、グラタン(Grattan)時代に形成された国民性、そして Davis の伝統を伝える存在であった。また “Beautiful Lofty Things” では “O'Leary's noble head” という表現がみられるように、彼を神聖化している。

次に “Sinn Fein” のリーダーであり、後にイギリス・アイルランド条約を確実なものとした、アーサー・グリフィス (Arthur Griffith) との関係をみてみよう。Griffith はヨハネスブルクで記者生活をしており、アイルランドに1899年に帰国して、週刊誌 *United Irishman* を創刊する。1906年まで編集にあたり、その後、それを母体にして “Sinn Fein” を結成するのである。Griffith はオーストリア帝国から自治を得たハンガリーの歴史の研究から、ハンガリーの歴史とアイルランドを重ねて考えていた。⁷⁾

Yeats は最初、Griffith を高く評価し、「リーダー誌がせいぜい Davis,

Emmet, Wolfe Tone そして Parnell を英国教会化されたアイルランド人 (“Anglicised Irishmen”) としか見ていないのに対して *United Irishman* 誌は、彼らの中に国民性の創始者をみつけている。⁸⁾」と述べている。

Yeats は最初は Griffith と親交を保つがシング (Synge) の “Shadow of Glen” がギリシャから題材をえてアイルランド的なものがないことを Griffith が批判したことから、微妙な間柄となっている。⁹⁾ Yeats は彼を「レーンやシングの中傷者、シン・フェイン運動の指導者、初代アイルランド自由国の首相¹⁰⁾」と呼んでいる。また文学観の相違を示すものとして、Lady Gregory への書簡で Yeats は、次のように述べている。

Did I tell you my idea of challenging Griffith to debate with me in public our two policies—his that literature should be subordinate to nationalism, and mine that it must have its own ideal?¹¹⁾

つまり Griffith の文学観はナショナリズムに従属するものであるのに対して、Yeats の文学観はそれ自体の理想をもたねばならないと述べている。

“Sinn Fein” と “IRB” との相違点は「Sinn Fein が受動的抵抗の政策に立ち二重王制をめざしたのに対して、IRB は物理的な力で共和国の樹立を目的とした。¹²⁾」アイルランド自由国の成立の経過と Yeats の政治的立場との関係は次章にゆずるとして Wolfe Tone 以来 Fitzgerald, Emmet, O’Leary はプロテスタントであり、O’Connell はカトリックであった。

Yeats にとって過去のナショナリズムの戦士は、「成功の見込みのない」ことを理解しながらも戦ってゆく政治上の殉教者であり、彼の英雄像につながっていたようである。このような英雄像を Yeats は Cuchulain などにおきかえて表現している。“Cathleen ni Houlihan” (1902年) では、アイルランドを貧しい老女にたとえ、彼女のために男たちが犠牲になろうと決意した時には、彼女はもう一度若い女王になれるという、この短い劇の中で Yeats は、共和国をつ

くろうとするナショナリストの運動を力強く体現している。老女にたとえられるアイルランドは多くの犠牲者の血を流した後、独立できるのだった。¹³⁾

Old Woman It is a hard service they take that help me.

Many that are red-cheeked now will be pale-cheeked; many that have been free to walk the hills and the bogs and the rushes will be sent to walk hard streets in far countries; many a good plan will be broken; many that have gathered money will not stay to spend it; many a child will be born and there will be no father at its christening to give it a name. They that have red cheeks will have pale cheeks for my sake, and for all that, they will think they are well paid.

They shall be remembered for ever,

They shall be alive for ever,

They shall be speaking for ever

The people shall hear them for ever.¹⁴⁾

このころの Yeats のナショナリズムを示すものとして、1900年4月2日のビクトリア (Victoria) 女王のアイルランド訪問に反対する運動がある。Yeats の手紙によれば、「この日は100年前併合法が遂げられた日である。そのことから併合に反対する集会を開くことを提案している。」¹⁵⁾ Yeats をおこらせたのはパンチ誌 (*Punch*) にのせられたアイルランド人の風刺漫画であった。それにもかかわらず熱狂的にビクトリア女王は歓迎される。

他方では、1903年の土地法 “Land Act” により Lady Gregory の Coole Park が小作人に売られ分割されるのを “Upon a House Shaken by the Land Agitation.” で嘆いている。

IV

19世紀の終わりから20世紀にかけて、すでにみてきたように、“IRB”、“Sinn Fein” 及び “Gaelic League” の民族主義的な運動の高まりの中で、1903年には “Land Act” により土地法の改正がなされ、古い地主制度を廃止して土地を農民所有のものとするものになる。¹⁾ そのような中でアイルランドをイギリスから独立させる気運が高まっていった。この運動の頂点にあるのが “Easter Rising” ある。“Easter Rising” は 1916年 Wolfe Tone や Mitchel の流れをくむ “Irish Republican Brotherhood” が中心となっておこされたものである。“Sinn Fein” の A. Griffith は参加しなかった。

Yeats は英国の Gloucestershire に滞在中のことであった。その報らせは、一般のアイルランド人を驚かせたのと同じように Yeats を驚かせた。²⁾ その驚きようは Robert Bridges に宛てた書簡からうかがえる。

Please forgive me for not having answered your letter of May 12. All my habits of thought and work were upset by this tragic Irish rebellion which has swept away friends & fellow workers. I have just returned from Dublin……³⁾

その蜂起は、共和国宣言を行ない、G. P. O. を占拠したが、市民の間に歓迎されず、一週間足らずで中止される。多くの犠牲者を出したイースターの蜂起について、Yeats は Lady Gregory への1916年5月11日の書簡で憂いながら書いている。

My dear Lady Gregory, The Dublin tragedy has been a great sorrow and anxiety. Cosgrave, who I saw a few months ago in connection with the Municipal Gallery project and found our best supporter, has got many years' imprisonment and to-day I see that an old friend Henry

Dixon—unless there are two of the name—who began with me the whole work of the literary movement has been shot in a barrack yard without trial of any kind

I am trying to write a poem on the men executed—‘terrible beauty has been born again.’ If the English Conservative party had made a declaration that they did not intend to rescind the Home Rule Bill there would have been no Rebellion. I had no idea that any public event could so deeply move me—and I am very despondent about the future. At the moment I feel that all the work of years has been overturned, all the bringing together of classes, all the freeing of Irish literature and criticism from politics.⁴⁾

この書簡の中で、処刑された友を悼むのは勿論であるが、この蜂起に大層心を揺り動かしている。「その時、私は反目する宗派間の和解、アイルランドの文学、批評を政治と分離させることなど積み重ねてきた仕事が倒れてしまうのを感じた。」と述べている。又、蜂起に関して「もし英国保守党が自治法案を無効にしないという表明を行っていたなら、反乱はおこらなかっただろう。」とも述べている。

このような歴史的背景に体する Yeats の感情をもとに “Easter 1916” は創り上げられた詩である。

Too long a sacrifice
Can make a stone of the heart.
O when may it suffice?⁵⁾

アイルランドが長い間おかれてきた状況をここで Yeats は「あまりにも永く

犠牲が続くと / 心は時に石ともなろう。 / ああいつまで続けばよいのだ。 / 」
と表現している。

For England may keep faith
For all that is done and said.
We know their dream; enough
To know they dreamed and are dead ;
And what if excess of love
Bewildered them till they died ?
I write it out in a verse——
MacDonagh and MacBride
And Connolly and Pearse
Now and in time to be,
wherever green is worn,
Are changed, chaged utterly ;
A terrible beauty is born.⁶⁾

“England may keep faith” とは Gladstone 内閣以来自由党が提出してきた自治法案が1913年可決されたが、第一次大戦で棚上げになってしまったことを意味している。Yeats は Lady Gregory への手紙で「処刑された男達に関する詩— “Terrible Beauty has been born again” を書こうとしている。」と書いていることと、“Sixteen Dead Man” で Wolfe Tone や Lord Fitzgeraldに関連させていることから、処刑された革命家と、“United Irishmen” とを重ね合わせて考えていたようである。ちなみに、処刑されたのは、

Roger Casement を含めて16人である。

How could you dream theyd listen

That have an ear alone
For those new comrades they have found,
Lord Edward and Wolf Tone,
.....⁷⁾

Thomas MacDonagh は作家であり、ダブリン大学で英文学を教えている。
James Connolly は “IRB” ではなかったが、協調路線をとり、“Workers’ Republic” を発行している。これで処刑された指導者は、クラーク、ピアースなど 15 名である。その後に予定された De Valera の処刑は、アメリカの世論の反対で英国が無期懲役にした。⁸⁾

この革命は “The Proclamation of the Provisional Government of the Irish Republic to the People of Ireland” 「アイルランド共和国、臨時政府宣言」の中にその趣旨を表明している。

「共和国は宗教及び市民の自由と、全ての市民に同等の権利と機会を保証し、全ての国民を平等に扱い、過去に外国政府の手で、大多数と少数とに分けることによって生まれた差別を忘れるような全国家をつくり、地方にまでゆきわたるような幸福と繁栄を追求する決議を宣言する。」⁹⁾

その他、“The Rose Tree” (April, 1917) では、“United Irishmen” 以来、自由と革命の象徴するバラの木をテーマにしている。

There’s nothing but our own red blood
Can make a right Rose Tree.¹⁰⁾

“On a Political Prisoner” (Jan. 1919) で蜂起に参加して投獄された Constance Gore-Booth (1868—1927) を歌っている。彼女は死刑を求刑されたが

後赦免された。しかし、一方では Yeats は “The Second Coming” (Jan. 1919) から狭いアイルランドのテーマを超えた普遍的なものに向かっている。

J. Stallworthy によれば、この最初の草稿で “Act of Union” の時の英首相 ‘Pitt’, ‘Burke’, ‘murderer’ を使用していたが、もっと普遍的な語を用いることで Yeats の詩は広がりを見せている、と指摘している。¹¹⁾

イースターの蜂起の後、第一次大戦の終結とともに英国のアイルランド政策は、自治主義政策へと変化してゆく。第一回目の Dáil Eireann (国民議会) が 1919 年 1 月に開かれる。これは Easter Monday, 1916 で宣言したアイルランド共和国の議会として自らを述べている。¹²⁾ Eamonn De Valera を大統領とし、A. Griffith は内相となった。1919 年から、イギリス・アイルランド戦争がおこった。これについて Yeats は、“Nineteen Hundred and Nineteen” を書き、戦火によって消失した議事堂を惜しんでいる。

Many ingenious lovely things are gone
That seemed sheer miracle to the multitude,
Protected from the circle of the moon
That pitches common things about.¹³⁾

それは 18 世紀 “Anglo-Irish Protestant” の伝統であった。

この戦争は 1921 年休戦となり、同年 12 月 “Anglo-Irish Treaty” (イギリス・アイルランド条約) が批准された。これにより併合法以来のアイルランドの自治は確立するが、この条約を受け入れるかどうかで、大きく二つのグループに分かれていった。

“Sinn Fein” の Arthur Griffith は賛成であり、De Valera は反対した。¹⁴⁾ 結局この条約は 64 対 57 という僅差で批准された。

“Anglo-Irish Treaty” の内容について、Hugh Shearman は 18 の項目を要約している。¹⁵⁾ その中で主だった項目は、(1) アイルランドに立法能力がある議会を

もった、カナダ、オーストラリア並みの自治領としての地位を認め国名をアイルランド自由国 (Irish Free State) とすること。(4)には “Oath of Allegiance” と言われるが、アイルランド自由国議会のメンバーは、自由国の憲法に忠誠を示すのと同時に、英国王 (His Majesty King George V) に忠誠をつくさねばならない。さらに、(11)として1920年 “Government of Ireland Act” (アイルランド統治法) でアルスター六州の分離議会が発足していたが、アイルランド自由国政府の力が条約批准後ひと月間は、北アイルランド (Northern Ireland) に及んではいけない。その理由として(12)そのひと月の間に北アイルランドの両議会は、アイルランド自由国として留るか、その外に出るかの態度を表明するであろう。もし分離するなら自由国側から一名、北アイルランドから一名、議長として英国より一名、合わせて三名からなる委員会を発足させ、住民の希望、地形などに合わせて境界を設定してゆく。(16)信仰の自由の保証。この条約で問題となったのは “Oath of Allegiance” (忠誠の誓い) と “Partition” (南北分割) の二点であった。

Griffith は ‘Battle of Kinsale’ 以前の文明、つまりゲール文明を復興することを目的とした。¹⁶⁾

Countess Markievicz は、この条約調印を Connolly や 1916年の共和国宣言に対する裏切り行為として激しく攻撃した。¹⁷⁾ 条約に関する対立は市民戦争へと発展してゆく。1922年12月6日条約は批准され、Irish Free State が正式に発足し、W. T. Cosgrave がフィン、ゲールを率いて初代大統領となった。¹⁸⁾ De Valera は、Sinn Fein 党を結成した。

さて、このような目まぐるしいアイルランドの政治と Yeats はどのように関わりあったのだろうか。1921年から1924年までの書簡は、Yeats の政局に対する関心の高さを示している。1921年12月22日、Olivia Shakespeare に次のような書簡を書いている。Yeats は一部の人間によって、この条約が受け入れられないことを恐れている。

I am in a deep gloom about Ireland for though I expect ratification of the treaty from a plebiscite I see no hope of escape from bitterness, and the extreme party may carry the country.¹⁹⁾

(私はアイルランドに関してとても憂鬱な気持ちになっている。私は条約批准を国民投票で決めることを期待しているが、うまく事が運ばないだろうと思っている。また過激な政党が国を牛耳る可能性があると思うからである。)

Yeats は最初からこの条約を受け入れることに賛成であった。この後 Yeats は居をオックスフォードからダブリンのメリオンスクエア(Merrion square)に移している。

市民戦争の時の混乱に関しては、1922年12月18日付で Shakespeare 宛に、「民主主義は死に絶え、力は古代の権利を要求している。これらの力をもつ男は、支配する権利があると信じている。民主主義に関していうなら、古い政治の世代は死に絶えたのだ。人々は何が正当であり、そうでないかを知らない。」と述べている。²⁰⁾

このような背景の中で書かれたのが、“Meditations In Time of Civil War” (1923年) である。Yeats は条約賛成でありながら、政府軍 (“the Regulars”) と不正規軍, (“Irregulars”) つまり条約に反対する一団のいずれにも加担していない。その詩の中で Yeats は、バリリー塔 (Thoor Ballylle) で “An affable Irregular” (愛想のよい不正規軍の兵士) と冗談をかわせば、²¹⁾ “A brown Lieutenant” (政府軍の中尉) と天候について話をしている。Cullingford はこの詩に Yeats の党派色のなさを見て²²⁾いるが、同時に、不毛な内乱に対する Yeats の失望をみることもできよう。1922年1月には新聞に書かれている秩序の崩壊 (“great disorder”) について、それはバリリー塔や Coole まで及ぶものではないが、デヴァレラ・コリンズ協定 (“De Valera-Collins pact”) から秩序の回復

(“better order”) を望んでいる。²³⁾ Yeats の〈秩序〉に対する願望は日増しに強くなってゆく。1922年5月には、Yeats は後に実行された議会が出来るという知らせを聞き、実現を危ぶみながらも、「ダブリンにいた時から私が期待していたものだった。」と述べている。²⁴⁾ Olivia Shakespeare 宛の 1922年1月7日付の書簡で “The country is getting more settling however since the Collins-De Valerapact.”²⁵⁾ (だが国はコリンズ・デヴァレラ協定以来次第に落ち着いてきている。) そして、1924年1月28日付 Edmund Dulac へ宛てた書簡で次のように述べている。

Dublin is reviving after the Civil War, and self-government is creating a little stir of excitement. People are trying to found a new society. Politicians want to be artistic, and artistic people to meet politicians, and so on. It seems to be the very moment for a form of drama to be played in a drawing-room. It is quite amusing trying to create a society without hostesses, and without wealth.²⁶⁾

(ダブリンは市民戦争後復旧しつつある。そして自国の政府は、興奮の面持をつくっている。人々は新たな社会を築こうとしている。政治家は芸術家でありたがっているし、芸術家は政治家と知り合いになりたがっている。客間で演じられる劇の一場面のようなものである。政府もなく、財源もないのに社会をつくろうとするのは、実におもしろい。)

市民戦争がようやく終わり、復旧し始めた街と、新国家の様子を述べている。新国家の議会は選挙による Lower House と Upper House (senate) から構成されていたが、Upper House の半数は Dail によって選ばれ、残りは大統領によって選ばれていた。Yeats は1922年から6年間 Senator (上院議員) として国家に仕えている。議員としてこの頃、政治を楽しみ「芸術家諮問委員会」の設

置を政府に求めている。²⁷⁾

この頃から、カトリックとプロテスタントという二つの軸の中で “Anglo-Irish Protestant” の軸に近づき始める。Yeats の属していた上院議員はプロテスタントの銀行家、法律家、商人からなり、政治的には自治を支持するユニオニストであった。Yeats は *The Irish Statesman* (August 2, 1924) に『必修科目としてのゲール語』 (“Compulsory Gaelic”) という題名の対話を書き、自由国の学校教育で英語とゲール語を学ばせるべきかどうかという、問題を扱っている。賛成者 (Paul) と反対者 (Peter) の対話形式をとり、Yeats 自身は、はっきりとした見解は述べていないが、Peter の立場に近い。又、現在も行なわれている全ての標示を二カ国語とするのを反対している。

Yeats は、この頃、新国家の秩序を見出すために、さまざまなものを読んでいる。

I read Swift for months together, Burke and Berkeley less often but always with excitement, and Goldsmith lures and waits. I collect materials for my thought and work, for some identification of my beliefs with the nation itself, I seek an image of the modern mind's discovery of itself, of its own permanent form, in that one Irish century that escaped from darkness and confusion.²⁸⁾

ここに述べられているように、Yeats は国家と自分自身の信条を同一化させるために資料を漁り、Swift, Berkeley, Goldsmith を読んだ結果、18世紀を「暗黒と混乱から抜け出た世紀」とみなしている。Torchiana は、自由国設立とともに Yeats がその知性と伝統を求めるために18世紀を回顧したと述べている。²⁹⁾ また、Burke に関しては1918年まで Oxford にいた Yeats は Burke を読み1920年代に全集を買い、上院議員を務める間に、多くの頁に下線を引いている

と Torchiana は指摘している。³⁰⁾

病死した Griffith が “Battle of Kinsale” 以前、すなわち “Tudor Conquest” 以前に国家の理想をおいたように Yeats は併合法以前の 18 世紀末 Grattan 議会に国家の理想を見い出した。

18 世紀末は、“Anglo-Irish Protestant” の時代であったが、カトリックにとっても “Penal Law” で課せられたいくつもの制限が取り払われ、併合法以降に較べて恵まれていた。このころを Yeats は「知力をもった人々が権力の極みに到達した」時代とし、「アイルランドや我々の性質の中にあるすぐれたもの、我々の建築の中に残存しているすぐれたものは、その時代に由来するものである」³¹⁾ という文章を引用して、自己の歴史観を表明している。

議会演説の中で次のように述べている。

We are the people of Burke; We are the people of Grattan; We are the people of Swift, the people of Emmet, the people of Parnell. We have created the most of the modern literature of this country. We have created the best of its political intelligence.³²⁾

ここで Yeats は、国民の精神的遺産として、Burke, Grattan, Emmet, Parnell を考えている。カトリック教徒がほとんどいなければ、その溝を歴史はすぐに埋めるだろう。³³⁾ と、宗教の対立を宥和した国家をつくろうとしている。

他方では、1930 年の日記の中で、自由国と 18 世紀末の Grattan 議会の関係について「役者は逆だが同じ状況だ」と考えている。Grattan 議会は Poynings' Law の廃止によって事実上の独立に誓いものをつくりだしたが、カトリック教徒の解放をプロテスタントの反対でのばしている間に、併合法と無秩序をもたらしてしまった。と述べた後、

We have something like the same situation to-day with the actors

reversed This Anglo-Ireland which accepts many Catholics has accepted the Free State after much hesitation. It would not spring to arms in its defence. Will the devout Catholicism and enthusiastic Gaeldom commit the error committed at the close of the eighteenth century by dogmatic Protestantism³⁴⁾?

他方、アイルランド自由国はカトリック教徒が多勢を占め、自治を得たが18世紀末の議会と同様に、今度は英国の後立てがなくなった時、プロテスタントにカトリックが制限を課することがないだろうかと、自由国の宗派間の反目を懸念している。

若き日は「ゲール協会」などでナショナリストとしての片鱗をみせた Yeats だったが、自由国成立後は、“Anglo-Irish Protestant”の中に自らをおいている。

結 語

以上、Yeats の政治意識の変遷について論じてきたが、Yeats の場合は非常に複雑な感情が入り混じっている。一言で言うなら、それは彼自身が言った、「英国系アイルランド人の孤立」(“Anglo-Irish Solitude”¹⁾)から端を発するものであろう。若き日はナショナリストであるが、アイルランド自由国後はユニオニストの立場に近くなった。Yeats のナショナリズムの特質をあげてみると、Wolfe Tone, Fitzgerald, Emmet, などの英雄からは、政教分離の立場と、民族の合一という伝統を学んだ。J. Mitchelの行為やイースターの蜂起のような物理的な力による独立運動を評価するが、それにひきかえ Sinn Fein のような受動的なナショナリズムは評価しない。つまり、審美的な立場といえよう。プロテスタントの中であって例外的に自由国の誕生を賛同し、また Victoria 女王の訪問に反対している、つまりセパラティストである反面、Land Act による

土地分割で過去のプロテスタントの貴族社会が消えるのを憂いている。Yeats のセパラティストとしての側面は、自由国後、後退してゆき、ユニオニストの立場に近くなる。

このような特質は、Yeats の宗教、生い立ち、文学の理想像とが、本当の意味でのナショナリズムと相容れなかったことを示している。これを説明するものとして次の一文を引用しておこう。

If I must attack so much that seemed sacred to Irish Nationalist opinion, I must, I knew, see to it that no man suspect me of doing it to flatter Unionist opinion.²⁾

(私がナショナリストの見解には神聖とみられていたことを批判しなければならないことがあるとすれば、ユニオニストの見解におもねるためにそうしているのではないかと、私が思われていないかを気をつけねばならなかった。)

これが Yeats の “Anglo-Irish Solitude” であり、彼の核心となるものであったと言えよう。

注)

I

- 1) T. W. ムーデイ / F. X. マーチン編著、『アイルランドの風土と歴史』（論創社, 1982), p. 245.
- 2) 入植の方法として “method of surrender and regrant” 又は, “method of confiscation and plantation” の方法がとられた。Hugh Shearman, *Anglo-Irish Relations*, (Faber, 1958), p. 14~16.
- 3) 大部分のカトリック教徒は貧しかったが, “gentry” としてかなりの土地を所有する者もいた。例えば George Moore の曾祖父はスペインとのワイン貿易で財をなし, Mayo州に拡大な土地を買った。Malcolm Brown, *The Politics of Irish Litera-*

ture, (University of Washington Press, 1972), p. 32. 参照。

- 4) Yeatsはアイルランドの主要な歴史的イベントについて次のものをあげている。“Oliver Cromwell, the Danes, the Penal law, the Rebellion of 1798, the famine, the Irish peasant”, W. B. Yeats, *Essays and Introductions*, (Macmillan, 1961), p. 314.
- 5) Joseph Hone, *W. B. Yeats* (Great Britain, 1943), pp. 1 ~ 6 .
- 6) *Autobiographies*, (Macmillan, 1955), pp. 33~4. 「私がスライゴーでよく知っている者は皆ナショナリストとカトリック教徒を軽蔑していた。しかしすべての人々はアイルランド議会の頃におそらく由来する偏見で英国を嫌っていた。」
- 7) *Ibid.*, pp. 101-2. 「多数の政治上の殉教者を生んだアイルランドのカトリック教徒は、私の知っているアイルランドのプロテスタントのもつ良い趣味や、家庭内の礼儀正しさや上品さをもたない。他方、プロテスタントも現世で出世することばかりを考えている。」

II

- 1) Hugh Shearman, *Anglo-Irish Relations*, (Faber, 1958), p. 59.
- 2) “The Declaration, Resolutions and Constitution of the Societies of United Irishman”, Sean Cronin, *Irish Nationalism: A History of its Roots and Ideology*, (Dublin, 1980), p. 23. 参照。
- 3) *Ibid.*, p. 23.
- 4) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, (Macmillan, 1961), p. 21.
- 5) *Autobiographies*, p. 418.
- 6) *W. B. Yeats Uncollected Prose 2*, Collected and edited by John P. Frayne and Colton Johnston, (Macmillan, 1975), p. 319.
- 7) 1792年以来カトリック教徒が弁護士業につくことが許可された。
- 8) *Irish Nationalism*, *op. cit* , p. 65.
- 9) *Ibid.*, p. 68.
- 10) *Uncollected Prose 2*, p. 230.

「私はオコーネルはエメットの正反対の主義をもっていたと思うことがある。オコーネルは、槍や銃、歌や物語を人々が捨てるように考えたが、同時にだましたり、今度は脅したりして仕事をさせるように考えた。彼はアイルランドに必要なある法律を勝ち取った。彼はアイルランドにわずかの法律を与えたが、愛国者を生み出さなかった。彼は成功した政治家だが、愛国者を生んだのは、失敗したエメットの方であった。オコーネルは偉大な人間であるが、彼の精神のあまりに多くが、アイルランドの実際的な政治の中にありすぎる。」

- 11) *Irish Nationalism*, *op cit* , p. 67.
- 12) *Ibid.*, p. 68.
- 13) 1847年のポテトの収穫高は通常の5分の1であった。
- 14) Davis は元来思想家ではなく、文化面でのナショナリズムは Ferguson より、歴史は Michelet より、経済理論は Sismondi より得たところが多い。だが、Davis と
いえば Young Ireland であり、Young Ireland といえば Davis のことであった。
Irish Nationalism, p. 77. 参照。
- 15) *Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 56.
- 16) W. B. Yeats, *Memoirs: The original unpublished text of the Autobiography
and Journal edited by Denis Donoghue*, (Macmillan, 1972), pp. 153—4.
- 17) *Ibid.* p. 153.
- 18) *Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 398.

III

- 1) 米国では、大英帝国自治領であるカナダに 1,200 人ものフェニアンが侵入した事件
があったが、これは米国の同情を得んがためであった。
Irish Nationalism, p. 89. 参照。
- 2) *Autobiographies*, p. 94.
- 3) Yeats は Davis の詩をすぐれた詩とは評価しなかったが、人々に訴える力をも
った点のみは評価した。
Essays and Introductions, p. 510.
- 4) *Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 120.
- 5) *The Politics of Irish Literature*, *op. cit.*, p. 168.
- 6) *Essays and Introductions*, p. 246.
- 7) *Anglo-Irish Relations*, *op. cit.*, p. 144.
- 8) *Uncollected Prose 2*, p. 289.
- 9) Griffith はこれについて次のように述べている。
“Mr. Synge’s adaptation of the old Greek libel on womankind—‘The
Window of Ephesus’—has no more title to be called Irish than a Chinaman
would have if he printed ‘Partrick O’Brien’ on his visiting card.....”
Ibid , p. 331.
- 10) *Autobiographies*, p. 416.
- 11) *The Letters of W. B. Yeats*, ed., Allan Wade, (Macmillan, 1954), p. 421—2.
- 12) ムーデー, *op. cit* , p. 335.
- 13) この解釈についてはムーデー及び, George Watson, *Irish Identity and the*

Literary Revival, (U. S. A., 1979), に従った。

- 14) *The Variorum Edition of the Plays of W. B. Yeats*, (Macmillan, 1966), p. 229.
- 15) *Uncollected Prose 2*, *op. cit.*, pp. 211—3.

IV

- 1) Wyndham法と呼ばれる。
- 2) Joseph Hone, *op. cit.*, p.303.
- 3) *The Correspondence of Robert Bridges and W. B. Yeats*, edited by Richard J. Finneran, (Macmillan, 1977), p. 47.
- 4) *Letters*, p. 613.
- 5) *Collected Poems of W.B. Yeats*, p. 204. 日本語訳は、鈴木弘訳『W. B. イエイツ全詩集』(北星堂, 1982), p. 110. より引用。
- 6) *Ibid* , p. 205.
- 7) *Ibid.*, p. 205.
- 8) 堀越智, 『アイルランドの民族運動の歴史』, (三省堂, 1979年), p. 133.
- 9) *Irish Nationalism*, *op. cit.*, p. 109.
- 10) *Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 206.
- 11) John Stallworthy, *Between the Lines: W.B. Yeats's Poetry in the Making*, (Oxford, 1963), p. 21.
- 12) *Irish Nationalism*, *op. cit.*, p. 123.
- 13) *Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 232.
- 14) De Valera は共和国を目指し、完全に独立した上で、英国との外的連携 (“external association”) を考えた。
- 15) *Anglo-Irish Relations*, *op. cit* , pp. 194—5.
- 16) *Irish Nationalism*, *op. cit.*, p. 141.
- 17) *Ibid* , p. 145.
- 18) Arthur Griffith は 1922年病死し Collins は内戦で死亡していた。
- 19) *Letters*, p. 675.
イースター以後、郵便には検閲制度ができ思うにまかせて、政治上のことを書けなかった。
- 20) *Letters*, p. 695.
- 21) *Collected Poems of W. B. Yeats*, pp. 229—30.
- 22) Elizabeth Cullingford, *Yeats, Ireland and Fascism*, (Macmillan, 1981), p. 112.

- 23) *Letters*, p. 683. それに該当する箇所を引用すると,

It is no use writing you politics, except perhaps that I have information from Dublin that the De Valera-Collins pact was caused by the fear of revolution. There is great disorder, as the newspapers will have told you, and even a little of it reaches us and reaches Coole, but so far nothing serious.

- 24) *Letters*, p. 682. それに関する文を引用してみると,

I hear that the Free State party will bring in a consitution especially arranged to give power to the heads of departments as distinguished from the politicians, and with a second chamber so arranged as to put power into the hands of able men who could not expect election in the ordinary way. It may be changed at the last moment, for Ireland is too turbulent to be settled even in plan, but when I was in Dublin that was the expectation.

- 25) *Letters*, p. 685.

- 26) *Letters*, p. 702.

- 27) *Letters*, p. 704.

- 28) W. B. Yeats, *Explorations*, (Macmillan, 1962), p. 344.

- 29) Donald T. Torchiana, *W. B. Yeats and Georgian Ireland*, (London, 1966), p. 87.

- 30) *Ibid.*, p. 169.

- 31) *Explorations*, pp. 346—7.

- 32) *The Senate Speechs of W. B. Yeats*, ed. Donald R. Pearse, (Faber, 1960), p. 99.

- 33) *Explorations*, p. 442.

Yeatsの宗教の反目に対する配慮は、学校教育に宗教のカリキュラムをもちこむ提案にも見られる。生徒は賛美歌を習う一方で過去の英雄について学び、双方の遺産を継承するだろうと述べている。*Uncollected Prose 2*, p. 459—460.

- 34) *Explorations*, p. 338.

結 語

- 1) “He have found Anglo-Irish solitude, a solitude I have made for myself, an outlawed solitude.” *Explorations*, p. 308.

- 2) *Autobiographies*, p. 233.

(1985. 1. 17 受理)